

# NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

August 2013 vol.18



島根県芸術文化センター  
SHIMANE ARTS CENTER  
島根県立石見美術館  
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「一木一草に神をみる 自然と美術」

観察する自然、経験する自然

企画展「生誕120年 宮芳平 —森鷗外の小説『天籠』の画家—」

森鷗外に愛された画家の物語

特別展「島根のやきもの」

近代の出雲・石見の陶芸

# 18



木喰《子安観音菩薩坐像(立木仏)》江戸時代 愛媛・光明寺蔵

## 「一木一草に神をみる 自然と美術」

2013年9月14日(土)～11月4日(月)

休館日:火曜日

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B

© Risaku Suzuki / courtesy of Gallery Koyanagi

A. 長谷川潔《コップに挿した野花(百日草と昼顔)》1946年 横浜美術館蔵

B. 鈴木理策《SAKURA N-74》2003年 作家蔵

## 観察する自然、経験する自然

私は、一木一草を出来るだけ細かく観察し、その感官を測り、その内部に投入する手段をもとめる。出来るだけ厳しく描いて一木一草の「神」を表したいがゆえに。<sup>※1</sup>

草木に神性を見だし、自然を厳しく観察して描くことで、世界の本質に迫ろうと試みた版画家・長谷川潔。9月14日から開催の企画展「一木一草に神をみる」は前出の長谷川の言葉をもとに表題をつけた。長谷川潔は1891年(明治24)横浜に生まれ、28歳のときに訪れたフランスでその国の自然に感銘を受け、以降フランスを拠点に制作、大正から昭和の初めにかけて活躍した。長谷川がいう「神」とはいかなるものかも少し考えてみたい。

自然を深く観察し、あらゆる地球上に存在するものに注意を向けてみると、非常に驚異を感じるわけですね。(中略)地球上に存在するあらゆるものの美というのは、結局地球全体のことになって、その地球全体のことになると、それが結局宇宙との関連になってくるわけです。そしてあらゆる地球上のものがやはり、宇宙と同様に、ある一つの理によって運行している。理によってつくり、理によって生きている。<sup>※2</sup>

ここで長谷川が言うのは、自然観察により存在する全てのものに必然的な理由や意味や役割があることがみえてくる、それら全ては大小の差はあれ「理」なる宇宙を統率する法則のようなものに通じて成立しているという考えである。この「理」こそが、冒頭の言葉の中では「神」と呼ばれるものであろう。

こうした作家の心のありようをふまえて作品《コップに挿した野花(百日草と昼顔)》を見てみれば、長谷川がこの小さな画面に世界を凝縮して表現しようと試みたことが見えてくる。花びらや実の付け方の異なる草花を組み合わせ、それぞれを細部まで緻密に、そして優劣なく均一に描いている。堅く鋭い線の特徴とするエングレーヴィングの性質を活かし、植物の繊維の向きに応じた線の疎密で陰影をつけ、すっきりとした静かな画面を作り上げている。

写真家、鈴木理策は、熊野三山の一つである神倉山の麓、和歌山県新宮市に生まれた。鈴木は「神」ということは特に言わないが、場の気配を捉えることを制作のテーマとし、修験の道である熊野古道や青森県の恐山など、神域と呼ばれる場所を選び撮影をしてきた。特に地元である熊野や、本展で展示する《SAKURA》シリーズを撮影する奈良県吉野山には繰り返し訪れている。「これ

から何か起きそうだな、と眼をやったところにカメラを向けてシャッターを押す。」<sup>※3</sup>という鈴木は、長谷川のように自然を見つめたりしない。《SAKURA》シリーズを例にとれば、見上げた先の空とともに捉えられる桜の姿は様々で、手前の桜が近すぎるためにほとんどの花がピンぼけして画面が淡いピンクに覆われていたり、反対に画面全てに焦点が定まって花の形がどれもくっきりとしていたりする。そうした写真により喚起されるのは作家の視覚を追体験するような感覚であり、すると吉野の山を歩きまよい、桜の木々に囲まれながら時を過ごす作家の姿がみえてくる。このとき鈴木にとって神域の自然は、対峙するものではなく、作家を取り囲む場として、経験する環境としてあると言えるだろう。作家は繰り返しそこを訪ね、予感に応じてシャッターを切っては気配としての神と一体となるのかも知れない。

本展では以上の二人の作品をはじめ、様々な方法で自然を捉え制作された作品約80点を展覧する。

※1 長谷川潔著、長谷川仁・竹本忠雄・魚津章夫編「長谷川潔 白昼に神を視る」p. 21「断章、折にふれて 31」

※2 前掲書 p. 13「断章、折にふれて 8」

※3 丹羽晴美 pp.112-127「瞬間と悠久を行き交う写真 熊野を原点として」鈴木理策 熊野 雪 桜 2007年、東京都写真美術館展覧会図録

# 「生誕120年 宮芳平 —森鷗外の小説『天籠』の画家—」

2013年12月21日(土)～2014年2月24日(月)

休館日:火曜日(ただし12月24日、2月11日は開館)、年末年始の12月28日～1月1日、2月12日  
開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企  
画  
展



図1



図2

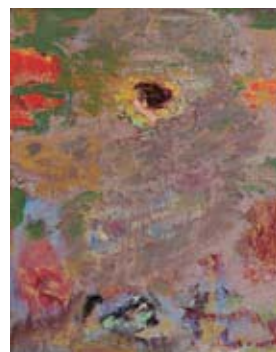


図3

図1.《自画像》 1914年

図2.《椿》 1914年

図3.《黒い太陽》 1967-71年

作品は全て  
安曇野市豊科近代美術館蔵

## 森鷗外に愛された画家の物語

今回ご紹介する宮芳平<sup>みやよしへい</sup>という洋画家は、けて誰もが知っているというような、高名な画家ではない。その人生が華やかな出品経歴に彩られていたり、順風満帆な画業生活を送ったというわけでもない。長らく信州諏訪で教師をしながら絵を描き続け、キリスト教への信仰を胸に抱き、78才の生涯をひっそりと終えた。どちらかという、片隅で咲く野の花のような人生を送った画家といえるだろう。しかし、彼が残した絵と詩は、強いメッセージ性を放ち、見る人に、沈思と淡い憧憬の余韻を残す。それは彼の辿った人生の物語がそのまま絵や言葉に表れているからかもしれない。では、宮芳平はどのような人生を送ったのか。それは石見とゆかりの深い文豪、森鷗外との出会いのエピソードにおいても、特別な輝きを放っている。

大正3年10月12日、東京美術学校の制服を着た一人の画学生が、森鷗外の住居、観潮楼の前にたたずみ、緊張しながらも固い決意を持ってその門をたたいた。この画学生こそが宮芳平である。新潟県魚沼市生まれの彼はこのとき21歳。父を亡くしたばかりで、画家になることを反対されていた実家からの仕送りは途絶えていた。一方、陸軍軍医總監など要職を務めていた森鷗外は52歳。軍医のかたわら、数多く

の文学作品を世に送り出し、世間に広く名が知れ渡っていた文学者であった。無名の画学生が全く面識のない高名な人物を突然訪ねたのには理由があった。苦しい生活のなか、身をけずるような思いで描いた洋画作品《椿》(図2)が第8回文部省美術展覧会(文展)に落選してしまい、その結果に納得がいかなかったのである。「おれの絵のどこが悪い?」という自問が彼を突き動かし、文展の審査委員をしていた鷗外に直接会って理由を聞くことを決意させた。さて、ここで例えばこれを自らに置き換えて想定してみた場合どうだろう?やはり客観的には、若さゆえの無謀な行動に思える。しかし果たして自分に同じ事ができるか。それだけの自信や勇気をもって、重い扉を開けることができるだろうか。

この日の宮芳平の決意の行動は、結果的にかけがえのない人生の師、森鷗外との出会いの起点となり、鷗外の筆の力をもってひとつの物語をこの世に生んだ。短編小説『天籠』<sup>てんろう</sup>である。鷗外はこの見知らぬ青年の突然の訪問を無下にせず、家に招き入れ、その話をじっくりと聞き、彼の渾身の作品に対して実直に自分の意見を述べた。『天籠』にはこの一連のいきさつと、二人の交流が書かれている。これらはまず前提とし

て、宮の飾らない純真純朴な性格があり、世渡りに不器用ながらも、芸術に邁進する姿を鷗外が気に入ったという背景がある。そして鷗外もまた、相手の社会的地位などで分け隔てることなく、面倒見が良く、度量の広い人物であったことから成った縁だといえるだろう。しかしこの事は、重い扉でも自ら開けないと、その先に待つ運命もまた開けないという、ひとつの教訓も与えてくれる。

宮はたびたび観潮楼を訪れ、鷗外に絵を見せたり、遠方にいる時は葉書を出すなど父のように慕った。一方、鷗外は宮の絵を買って支援し、他にも絵を買ってくれそうな知人を紹介するなど、彼の画家としての成長を温かく見守った。この交流は鷗外が60歳で亡くなるまで続く。宮は、その後、家族を養いながら生涯にわたって絵を描き続けるが、芸術と生活、理想と現実の間を悩ましく行き来しながら、詩的情緒にあふれた作品群を生み出していった。宮の人生は、鷗外の小説『天籠』で綴られた、悩める若者の姿だけに止まらない。この機会に是非、その生涯の物語の全貌をご覧いただきたい。

(左近充直美 当館専門学芸員)

## 「島根のやきもの」

2013年12月26日(木)～2014年2月16日(日)

休館日:火曜日(ただし2月11日は開館)、年末年始の12月28日～1月1日、2月12日

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

## 近代の出雲・石見の陶芸

島根県の焼物は、その所在により大きく出雲焼と石見焼に分けられている。出雲地方では、江戸後期に松江藩主松平不味が茶の湯に傾倒し、この地方の工芸の文化的状況を一変させた。不味の指導のもと「出雲焼」と呼ばれた楽山焼と布志名焼でも茶陶器の制作が盛んになるのだ。出雲地方では、現在もこうした茶の湯の文化の伝統が受け継がれている。一方、日本三大瓦のひとつ石州瓦の生産地であり、広い範囲にわたって焼物の盛んな石見地方では、江戸後期から「はんど」と呼ばれる大きな水瓶が盛んに生産されるようになり、これが石見焼製品の中心になった。つまり石見焼は、庶民の日用品に、その特徴があらわれたのだった。

明治時代になり、それまでの社会体制が変わると、出雲焼は大きく変化することになった。開国とともに海外への輸出を視野に入れた製品も生産するようになるのだ。「輸出陶器」と呼ばれる欧米向けの高級品である。この時期の出雲・布志名の輸出陶器を中心とした製品の変化は、興味深い。まず松江藩の御用窯だった窯も含め、布志名の窯元が結集し、「若山陶器製造会社」をつくり、欧米への輸出を始めた。この会社がうまくいかなくと、また新たに会社をいくつかつくり、競争と協力をしあいながら、陶質や釉薬の改良を重ね、輸出陶器の生産を続けた。例えば「釉下彩」と呼ばれる西洋で発展した技法を、アメリカのルック

ウッド・ポタリーという会社の製品を見て取り入れたという記録が残っている。当時の布志名焼は、国内外の博覧会で賞を得て、海外でも名の知れた焼物だった。

また、布志名では、主に京都でおこなっていた絵付を地元で行うための教育、研究施設である「伝習所」を設け生産体制を充実させていった。しかし明治の末、それまでの「ジャポニズム」と呼ばれる欧米での日本の芸術に対する趣味が下火になると輸出陶器は不振に陥っていく。かわって国内向けの日用品に力を入れるようになり、布志名焼は大正末期から昭和の初めに、産業としてのピークを迎えた。

それに対して、明治以降も庶民の生活の必需品だった石見焼の水瓶は北前船で各地に運ばれた。また大正期の山陰線の開通により石見焼は、昭和初期に全盛期を迎える。こうした時期、民藝運動を指導した柳宗悦が、島根県を訪れた。1931(昭和6)年に島根県商工連合会の要請で、島根県の工芸の状況を視察したのである。この柳の来県をきっかけに、島根の民藝運動が興ったのだった。島根を訪れた柳は、当時の焼物としては、喜阿弥焼を高く評価した。喜阿弥焼は江戸時代には津和野藩の御用窯だった窯で、石見焼の生産の中心であった江津や浜田からは離れた場所(現在の益田市)にあった。柳は『大阪毎日新聞』島根版に「雲石探美行」と題した連載の中で、右記のような記事を書いている。

## 「益田にて」

石見益田には二つ心を引かれるものがある。一つは最も有名な雪舟の庭、一つは名もない粗陶器。(中略)窯は小野村喜阿弥だといわれる。益田から西方一と駅である。そこで鉄釉の碗やら壺やら土瓶やらが出来る。まだマンガンやらクロームに犯されていないから、釉がほんものである。黒ければ漆の様に、赤ければ鼈甲の様に光る。のり入れだという小壺は形が卵のようで、蓋が美しい、焼け具合で曜変が来ると、例の大名物油屋の肩衝を想わせる。今時利休でもいたら、早速中から名器を選び出すだろう。土瓶は近來どこの窯でも墮落しきってしまったが喜阿弥の飴葉土瓶は昔のままである。卓上で紅茶の土瓶にでも使ったら誰だって見直すだろう。(後略)

つまり、柳は、生活の中で培われた美意識のあらわれた日用品に愛着を感じたのだ。柳は後日、島根県の民藝運動に関わった友人に、たくさんの喜阿弥焼の小壺の入手を依頼したことが知られている。

近代化を進めて欧米の人々の間で人気となった出雲焼。伝統的なあり方で作り続け柳や民藝運動を進めた人々に評価された石見焼。明治から昭和初期にかけて島根県では、特徴ある陶器を生み出していた。

(河野克彦 当館専門学芸員)



A



B

A.《布志名焼 色絵金彩花鳥文花瓶》 明治時代 島根県立美術館蔵

B.《喜阿弥焼 罫壺》 個人蔵